

# さとうきびにおける ツマジロクサヨトウ防除対策について

○幼虫の特徴 (若齢幼虫(ふ化して間もない小さい幼虫)を発見した場合は、老齢幼虫(さなぎになる前の大きい幼虫)を探すか病害虫防除所に相談すること)

実際の大きさ  
(老齢幼虫)



排出直後は球形に近い。色は様々。(写真はとうもろこしの被害)



淡色の『逆Y字』紋がある。  
淡褐色の網目模様がある。



大きな黒斑がある。

体長が約2cm以上の幼虫で見られる特徴

## ○食害の状況

★ツマジロクサヨトウは、若くて柔らかい部位を好んで食害する

### ① 茎の先端部



著しい場合は茎の先端部が切断される。

### ② 茎



茎の一部をかじる。

### ③ 葉



不定形の穴が多数あく。

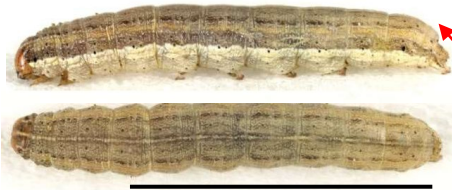


目立った食害がなくても幼虫が潜んでいる場合がある。



# ○ツマジロクサヨトウと本作物で見られる他の幼虫の違い

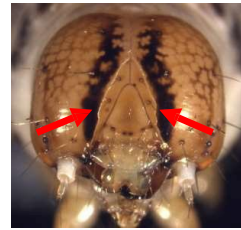
## ◆ アワヨトウ



最大40mm前後

顕著な黒斑なし

頭部



正面に2本の黒帯

## ◆ カンシャシクイハマキ



最大20mm前後

体は透明感がある白色

頭部



一様に赤褐色

## ◆ イネヨトウ



写真提供：沖縄県

最大40mm前後

体は淡黄色～淡褐色

顕著な黒斑なし

頭部は一様に赤褐色

## ◆ アフリカシロナヨトウ



群生相 (暗色)

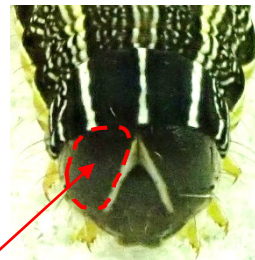
孤独相 (淡緑色)

長い白筋

顕著な黒斑なし

大部分が黒色  
網目は目立たない

頭部



群生相 (暗色)

頭部



写真提供：沖縄県

孤独相 (淡緑色)

暗色の縦帯

最大50mm前後



体がほぼ黒色になる場合もある

## 1. 調査方法

ほ場におけるツマジロクサヨトウの調査は、幼虫が葉などを食害した痕や虫ふんなどの有無を確認することにより行う。

幼虫による被害は、ほ場内の一部のみに発生することがあるため、可能な限り、ほ場内に立入り、ほ場全体を広く目で見て調査する。

## 2. 防除対策

### (1) 早期発見

生育初期に幼虫に食害されると被害が大きくなるため、ほ場を定期的に見回り、早期発見に努める。

(注) ツマジロクサヨトウと疑われる虫を発見した際は、速やかに病害虫防除所や普及指導センター等に連絡してください。

### (2) 早期防除

発生ほ場では、登録農薬による防除を実施する。登録農薬については、最新の農薬登録状況を確認し、農薬使用基準を順守する。散布にあたっては、新葉の葉しょう基部に潜り込んでいる幼虫に届くよう、株の上部までしっかりと散布する。

粒剤は、防除効果が現れるまで時間を要することが多いため、粒剤を施用したほ場において発生が続く場合には、速効性のある農薬による追加散布を行う。

老齢幼虫になると農薬の効果が低下するため、可能な限り、若齢幼虫のうちに防除することが望ましい。

なお、周辺作物への農薬の飛散（ドリフト）には十分注意する。

(注) 農薬の使用に当たり、不明なことがある場合には、病害虫防除所や普及指導センター等関係機関に相談してください。

### (3) 収穫後の対応

収穫後に残った株や土壌中に幼虫やさなぎが残存している可能性があるため、収穫後は速やかに複数回の耕うんを行う。

なお、株出し栽培等により、収穫後に耕うんしないで同一のほ場で継続して栽培する場合には、農薬の散布、土壌混和等による防除を行う。

## 3. 前作に発生が確認されたほ場等における防除

(1) 土壌中にさなぎが残存している可能性があるため、収穫後は速やかに複数回の耕うんを行い、残存害虫を駆除してから新たに定植する。

なお、株出し栽培等により、収穫後に耕うんしないで同一のほ場で継続して栽培する場合には、農薬の散布、土壌混和等により予防的防除を行うとともに、定期的な見回りによる早期発見に努める。

(2) 生育初期に幼虫に食害されると被害が大きくなるため、ほ場を定期的に見回り、早期発見に努め、発生を確認したら直ちに農薬の散布、土壌

混和等を行う。

- (3) 前作に発生が確認されたほ場の周辺ほ場においても、定期的に見回りを行い、早期発見、早期防除に努める。